

1 本時の目標

360度 VR 動画を用い、自転車で交差点を直進する時に潜む危険を予測できるようにする。特に、ルールを守っているだけでは防げない危険に対する自衛行動ができるようにする。

2 活動のめあて 見えないきけんを予測しよう

【学習で押さえていことがら】

- ・ 自分がルールを守っているだけでは防げない交通事故があることに気づく。
- ・ 自転車での交差点直進時に「かもしれない」と危険を予測する重要性を理解する。

3 準備

学習用タブレット端末、資料③「自転車で交差点を直進 ワークシート」

※先に、マニュアル動画「交通安全コンテンツを活用してみよう！」をご覧くださいと、流れが分かりやすいです。

マニュアル動画



📌 動画の容量が大きいため、通信環境により各自で端末を利用することができない場合、グループ等の複数人で1台の端末を共有します。

4 本時のポイント

導入(5分)	(例)交通事故から身を守るために、どのような行動を心がけていますか？
活動 ①(5分) 動画を見たら、まずはひとりで考えましょう	・ 動画は全画面再生で見ます。 ・ 動画は、スワイプすることで 360 度見ることができます。 ・ <u>大人から正しい・適切な行動については教えません。</u>自分の考えと自己評価点を記入します。
活動 ②(28分) みんなで考えましょう	・ ②では、3つのポイントを見て、危険な車や人を見付けたら、グループ内で見付けたことを伝え合います。また、見付けた危険な車や人によって起こりうる事故や危険な場面について話し合います。 ・ 動画から見付けた危険な運転や歩行をする人の気持ちを話し合います。 ・ ③では、これまでの活動を振り返り、安全な行動や気をつけるポイントをグループで話し合います。 ・ ④では、「子どもだけでは防げない危険」という視点で、これまでの活動を振り返らせます。そうすることで、「大人にやってほしいこと」が考えやすくなります。 ※メモ欄は必要に応じて活用します。必ずしも埋めなければならない欄ではありません。 📌 ワークシート裏面下に、鳥瞰動画の QR コードがあります。必要に応じて活用してください
活動 ③(7分) もういちど、ひとりで考えましょう	・ 再度、自己評価点を記入します。<u>1回目の点数より下がった場合、交通安全に対する意識は、より高まったともいえます。</u>②に記入した理由に着目してください。 ・ ③については、話し合った②の③の内容から選ぶ方式でもよいです。 📌 後日、ワークシートの記録を見て、その後も危険を予測しているかどうか振り返らせるとより効果的です。

※マニュアル動画を一時停止しながら、動画と一緒に活用し、指導いただくことも可能です。

VR きけん予知③ 自転車で交差点を直進 指導のポイント

※ この教材は「子どもたち自身で話し合って危険を考える」ことを主眼としています。この「指導のポイント」の内容を「正解」として伝えることは控え、話し合いがうまく進まない場合や、動画から危険をなかなか発見できない場合に「ヒント」として利用することにとどめてください。また、ここに書かれていない危険を子どもたちが指摘した場合でも、それらは子どもの視点からの発見ですから、けっして「誤り」や「不正解」とはしないでください。

🕒活動終了後、以下を参考に、動画上の危険な場面について解説を加えると有効です。

ポイント1:左からの停止しない車両



動画のような信号が無い交差点では、一時停止の標示・標識があっても、一時停止をせずに、飛び出してくる車両があります。

特に、交差点の四方に塀、植え込み、電柱、看板などがある場合には、車両から自転車は見えにくく、見えた瞬間に出会い頭で衝突します。実は「出会い頭事故」の中で最も多いのが、この状況です。しかも、自転車がヘルメットを着用していない場合には、このパターンの事故での致死率はかなり大きくなります。

ポイント2:左からの歩行者



動画のような信号が無い交差点では、一時停止の標示・標識があっても、多くの歩行者が一時停止しないのが事実です。

歩行者と自転車との事故により、自転車側が加害者となり、歩行者が重大な障害を負ったり、死亡したりする事故が絶えません。自転車の速度でも歩行者に致命傷を与えるエネルギーがあります。特に、自転車側が損害賠償責任保険に加入していない場合、高額な損害賠償により自己破産する事例も増えています。

ポイント3:右からの車両



車の運転者には「自転車はスピードが遅い」という思い込みが働きがちです。また、「自転車は歩行者と同じように道の端を走る」といった心理が働き、車が走行するエリア(車線内)に自転車は入って来ないと思い込みがちです。

特に高学年になると自転車をこぐスピードが上がり、車道を走行する機会も増えます。しかしながら、車の運転者は自転車を軽視しがちであるのが事実です。